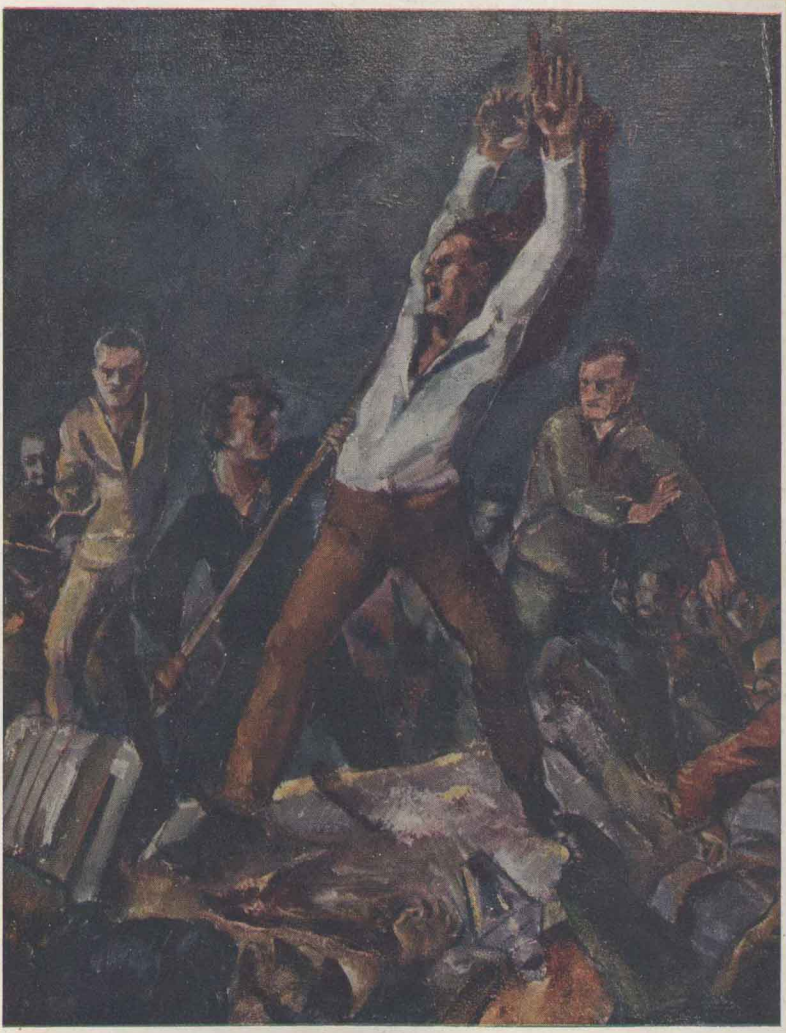

БАРСУКИ

ЛЕОНИД ЛЕОНОВ

著フノーオレ・ドーニオレ

熊穴

譯葉白村中

新潮社出版

第二期
世界文學全集(15)
穴熊
第十五回配本

昭和七年一月二十日印刷
昭和七年一月廿五日發行

飜譯者　中村白葉
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町
發行所　新潮社
電話牛込
(長)八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番
振替東京　二三、四五〇番

東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

解說

レオニード・レオーノフ小傳

一、生れ――一八九九年五月十九日、モスクワ。
一、祖先――カルーガ縣僻陬の農夫。
一、祖父――モスクワ　ザリャーヂエ（商店街裏街）の小店商人。
一、父――農夫上りの獨學詩人、雜誌記者。
一、一九一八年モスクワ第三中學校卒業、モスクワ大學へ入學を志せるも拒絶さる。（赤衞軍より脱走後のこと。）
一、アルハンゲリスクに暫く居住。（一九〇九―一〇年、父、ニコライ二世の爲めこの地に流刑されしによる。）これより北方を好むに至る。
一、初めは詩作多く、散文は一九二二年より書き始む。處女作發表同二二年「ブルイガ」。

以上はレオーノフ自身の手に成る自傳である。レオーノフの傳記的材料としては、今のところこれ以上のものが譯者の手許にない。尤も、これでも大體は十分だが、尙ほ一つ蛇足を添へれば、處女作「ブルイガ」發表の一九二二年以後、續いて五六の短篇を發表し、同じ二四年には夙く既に最初の長篇「穴熊」を發表して、一躍革命後のソヴェート

文壇に一流作家の盛名を恣まにするに至つた一事と、その後一九二七年に、第二の長篇「盜賊」を發表して、新たに起つた心理主義的傾向にも代表作家の一人とされるに至つたといふ一事とである。勿論健在、日本流に數へても、今尙年齡僅かに三十三歲の青年である。

「穴熊」に就いて

小說「穴熊」を正しく理解する爲めには、先づその母胎たる當時の新興ソヴエート文學に就いて、その大體を知つておく必要がある。それには丁度、藏原惟人君の「最近の露西亞文學」なる論文の中に恰好な一節があるから、便宜上こゝにはそれを借用しておくこととする。

――前略――「十月革命直後數ヶ年に於けるロシアは、」と藏原君は書いてゐる。「所謂戰時コンムニズムの時代を經過した。それは政治的經濟的には一つの階級が他の階級からその主權を奪はんとする時代であり、精神的には一つのイデオロギイが他のイデオロギイに優越せんとして鬪爭する時代である。從つてそこに生れ出でる文學は、かくの如き時代に共通なる戰鬪的、主觀的、抽象的(概念的)な相を呈せざるを得なかつた。それは現實の各異つた事象を靜觀して、それを客觀的に描寫し得るには餘りに混沌とし、餘りに昂揚した時代であつたのである。所が市民戰爭が既に治り、國民經濟がほゞ戰前の水準に歸り、社會生活の安定が保證されると共に、文學の領域にあつても、主觀的抽象的時代が去つて、客觀的具體的時代が始まらうとしてゐるのである。この徵候は最近文學の中心が詩歌から散文に移りつゝあること、抒情的な自己表現から去つて、廣大なる現實の世界を把握しようとする長篇小說の復活しつゝあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ること、等に依つて證明することが出來よう。この意味に於いて一九二五―二六年のロシヤ文學は、單に文學史上に於ける一つの過渡的時代として看過し去るには餘りに重要なる時期である。それは革命後のロシヤ文學が新らしい廣大なる領域にその第一歩を踏み出した時期として特別な注意を必要とする。」――後略――

小說「穴熊」は恰もこの時期の所產であつて、謂はゞ新興文學第二期の先驅をなした作品に當るのである。この意味で、その出現は當時のロシア文學に於ける一つの「事件」であつたと言はれ、また作者レオーノフの個人的方面から見ても、作家としての一飛躍であつたと言はれてゐる。なぜなら、これを發表するまでのレオーノフは、當時の讀書界からゴーゴリ、ドストエーフスキイ、ゴーリキイ等の模倣者として、また半神祕主義者として遇せられてゐたのであるが、この作を發表するに及んで一躍、新興文學の代表作家(チヤムピオン)の一人となり、その水先案內(パイロツト)となつて、文壇の最高位に押しのぼせられたからである。蓋しこの小說にあつては、それまでの諸作に現はれて作者レオーノフの天禀の傾向を危ぶませた半夢想的、半現實的なところが影を沒して、誤りなき文學の大道たる生命ある健全な現實主義(リアリズム)が、以前の朦朧たる象徵家を完全に征服し盡してゐるからに外ならない。

では小說「穴熊」とは抑も何を書いたものか?――以下わたしは、特に一般讀者への便宜を主として、簡單にその梗概を語りながら、(これはこの作が在來の小說に比して型を異にしてゐる爲めと、機構が可なり複雜である上に、人物の數が非常に多いので、卒然たる讀下に際しては、些か難解な點があるかも知れぬと思ふ譯者としての老婆心である。)少しく作の解剖を試みて見る――

開卷先づ現はれるのは、エゴール・ブルイキンなる小店商人である。これはこの作の主人公ではないが、將來いろん

な事件の導火線となる可成り重要な人物である。これがモスクワのザリャーヂエ（裏街）から生まれ故郷のウォールイへ嫁取りに歸る。そしてその歸途に二人の少年――パーシャとセーニャの兄弟をモスクワへ伴ふ。この二人こそ本篇の主人公であり、その生まれた村のウォールイこそ將來「穴熊」達が反ソエート一揆として活躍する舞臺である。

二人の少年の出郷に依つて小説の舞臺はモスクワへ移る。二人はブルイキンの世話でブイハーロフの店、裏街の食料雜貨店に奉公する。かくて三、四年、その間に反抗家の兄パーシャは店を出て工場勞働者になつてしまふが、セーニャは、やがて歐洲戰爭が起り、兵隊として召集されるまで同じ店に勤めてゐる。セーニャはそこで具さに生活といふものを知り、文字を知り、戀を知り、人を知る。この間の彼の生活に關聯して、こゝでも數々の人物が點綴されるが、それは多く都市プロレタリアートの好典型である。精細を極める感覺的な裏街の描寫――そこに巣喰つてゐる各種プロレタリアートの型の創造――作者の手腕は、その邊一帶のじめ〳〵した空氣、慰めの少い彼等の暗い生活を繪畫的彫刻的に描き盡して、全く遺憾なきものがある。

本篇の女主人公ナスチャはこの裏街での有產階級、家主セクレトーフの一人娘である。セーニャは十八の年にふとしたことからこの娘と戀に落ちる。この戀はセーニャの出征まで續くが、勿論その間に若干の消長があり、カーチャといふこれも裏街の娘でナスチャの友達がちよつとこの戀に絡んだりする。が、結局、すべては未解決のまゝでセーニャは戰地へ赴いてしまふ。ブルイキンはその前に戰爭に行つてゐる。

やがて革命――赤旗――市街戰――血――

所謂「十月」が始まると共に、ザリャーヂエも壞滅して、その住民は四散する。ザリャーヂエの終局と共に、小説「穴熊」の三部にわかれた第一部も幕を閉ぢるのである。

かくて第二部――第二部は、ウォールイ近傍の雪の野の描寫から始まる。時代はソエート政權樹立直後である。この雪の野をブルイキンが娶つたばかりで村に殘して行つた若い女房アーンヌシカが、ソエート委員ポロギンキンを馬車に乘せて運んで行く。ポロギンキンは色事師である。アーンヌシカは、戰地へ行つたまゝ便りのない夫を多分死んだものと思つてゐる。雪の曠野の夜は遂にこの男女を道ならぬ戀に誘ふ。間もなくアーンヌシカは姙娠する。

一方ブルイキンは戰地から脫走して、幾年振りかに村へ歸つて來る。女房の裏切りは彼を陰險な復讐魔にする。相手をソエート委員と知るに及んで、彼はソエートそのものに怨恨を培ふ。

ブルイキンに續いてセミョーン(セーニャ)も戰地から村へ戻つて來る。彼は體軀堂々たる偉丈夫になつてゐる。この頃ゾエート政權は、各村々に委員を派して、食糧の徵發に當らせる。百姓達は穀物を隱蔽する。――强制――反抗――衝突――暴力――血――それにセミョーンも捲き込まれ、ブルイキンも捲き込まれる。

これより先き、赤衞軍からの脫走兵達が、ソエート政權の眼を憚つて、森の中に隱れてゐる。村人等はこれをレトゥーチイと呼んで、ひそかに彼等を援助してゐる。セミョーンを筆頭としてソエートに反抗して起つたウォールイ達は、大擧森へ隱れて、この連中に合體する。彼等は穴熊の擧みに倣つて、密林中に穴を掘り、そこに住居を定めて、活動を開始する。「穴熊」(ベルスキイ)の名はこゝから生れたのである。

セミョーンは、眞先きにソエートの役人を殺した勇者と思はれたのと、長く都會生活をしたり軍隊生活をしたりして多少教養のあつた爲めとで、いつか自然に穴熊達の頭領格となり、ヂバンダといふ馭者上りの敏捷な男がその副頭領格となる。

活動の手始めに、彼等は先づ村のソエート委員達を殺し、執行委員會を燒き拂ひ、ソエート村として知られた隣村

グサキイを掠奪する。丁度この頃、モスクワのザリャーヂエの終局と共に家を失ひ父を失つたナスチャは、ソヴエートに對する復讐の念に燃えながら、セミョーンを頼つて村へ來て、男裝してヂバンダの弟となりすまし、セミョーンに從つて、「穴熊」達の仲間へ入つてゐて、この掠奪の際にも大いに活躍する。

セミョーン――ナスチャ――ヂバンダ――

やがてこの命がけの烈しい生活の中に、畫尙ほ暗い密林の中に、戀の赤い花が咲く。しかもそれは三角關係の狂ひ咲きである。ナスチャが女であることが暴露すると共に、そこには尙ほ多彩な綾が渦卷く。

「穴熊」達の勢ひは一時猖獗を極める。近村から來り合するものも多く、その噂は郡、縣の政權を經て、モスクワなる中央政權にまで達し、遂に討伐隊が派遣されるまでに立ち到る。ところが、この討伐隊の指揮者アントンこそは、少年時代にザリャーヂエから行方不明になつた兄のパーヴェル（パーシャ）で、最後にこの二人の兄弟――一つは都市に對抗して起つた農民一揆の指導者であり、一つはその討伐に向つた都市プロレタリアートの代表者である二人の兄弟が、暗鬱な森の奥に幾年振りかの顏を合はせる劇的場面に續いて、曉の森の靜寂を破る銃聲となり、遂に「穴熊」連の潰滅となつて終るまで、第二部、第三部は共に、革命後の農村の緊張した生活描寫に終始する。そしてこの第二部第三部に於いても亦、第一部同樣、可成り數多くの人物が、それ〴〵の役割を以て活躍するが、それらが皆、殆ど言ふに足らぬ端役の末に至るまで、はつきりした個性を以て描き分けられて、前古未曾有とも言ふべき大革命直後の一時期の生んだ人間のタイプ――附和雷同的に新興勢力に走る百姓、新らしくプロレタリヤ政權に參加しながら、傳統的の役人風を吹かしたがるソヴエート委員、何等定見なくして時の勢ひに媚びる犬の如き隨伴的分子等が、一個の人間として全的に紙面に躍動してゐる有樣は、それらの人々によつて醸し出される農村生活の事件、雰圍氣、四圍の情況等の

生々たる描寫と相俟つて、全く、誇張なしに、作者の手腕に歎稱を惜しませないものがある。わたし達は、これが僅かに二十六歳の青年作家の筆になつたものであることを思ふ時、益々この作者の並々ならぬ大手腕の持主なるを痛感しないではゐられないのである。

以上の說明で大體わかる通り、この「穴熊」は決して所謂宣傳小說ではない。一個の立派な藝術品である。過渡時代の文學には往々、その時代の產物として以外に全然價値のないもの、その時代色をすら完全には反映してゐないものが多い中に、これはまた如何にもよくその時代の動きをとらへて、革命といふ大きな事件を背後にした都市と農村の民衆の生活の活畫圖を與へてゐる點、到底淺薄な宣傳文學などの企て及ぶところではない。されば藝術家レオーノフは、國を擧げてソヱート謳歌の時代に住し、ソヱート文學の代表的作家として立ちながら、この一篇を描くに當つては、ソヱート政權の衝に立つ人々の不注意、無理解、誤謬等をも憚るところなく剔抉してゐる。例へば、本篇の中心事件である農民の反ソヱート一揆の如き、レオーノフをして言はしむれば、その罪は決して農民側にのみあるのではない。否、寧ろ、政府當局の地方の農民生活に對する不用意無理解と、農村に對する政策の誤謬とにその罪を歸すべきであるとしてゐるのである。レオーノフに從へば、即ち小說「穴熊」の敎へるところに從へば、農民は都市プロレタリヤの意嚮、つまり政府の意嚮が奈邊にあるかなどゝいふことに對しては、無理解どころか、全然何にも知らないのである。知つてゐるのはたゞ自己の利害ばかりである。ところが、この農民の無智に對して、政府當局がまた殆ど無智であつた。いや、この方は或は無理解といふ方が當るかも知れない。そこで彼等は、都市の復興を計る糧を、一圖に農民に仰がうとした。簡單に、農民は喜んで彼等相互に共通したプロレタリヤ文化の建設に協力するものと考へた。いづくんぞ知らん、都市プロレタリアートと農村プロレタリアートの利害は決して共通ではなかつた。この兩

者は互に二つの相異る要素であつた。「穴熊」の叛亂は、即ちこゝから起つたのである。だから、この二つの要素の提携は、本篇の末尾で主人公アントンが弟のセミョーンに說いてゐる如くに、何れは農村（お前達）の方から、都市（われわれ）の方へ行くことに依つて實現されるものとしても、指導者側にある都市の任務としては、農村に理解を强ひる前に、先づ自ら農村を理解すべきが順序である。――かういふのが、つまり、本篇全體から歸納して考へられるレオーノフの見解である。そしてこの政府側の無理解の例證として擧げられてゐるのが、ウォールイ一味の反ソヱート氣勢を更に强めた、ジンキン草場問題である。（この草場に關する挿話は第二部第三章にその由來が記されてある。）これは、ウォールイとグサキイ、互に相隣る兩村年來の訴訟事件を、地平政權が餘りにも輕卒に、無雜作に解決したことに基因してゐる。しかもそれは餘りに不公平な、片手落ちの裁斷であつた。この爲めに一方の農村ウォールイは、その生活の支持を失つて、愈々益々革命政府に對する反感を高め、一方思はぬ喜びを得た農村グサキイは、一村を擧げてソヱートに歸順するに至るのである。このジンキン草場が、相隣る兩村の間に解き難い葛藤をかもすに至る由來は、惡むべきブルジョワ根性のカリカチュア的挿話として、本書の第二部中に一寸愉快な一章を提供してゐる。グサキイは鷺鳥の意味である。ウォールイは泥棒の意味である。序でに附記しておく。

以上でわたしは、わたしとして言ひたいことの大體を終つた。最後に尙ほ少しばかり、この作の缺點として一般から數へられてゐる一二の點を說明して、この拙い解說の稿を終らうと思ふ。

その一つは、餘りにも大きな、並はづれて平靜な、冷やかに過ぎる位ゐの客觀性があるといふのである。作者が餘りに自己を隱し過ぎてゐることにあるといふのである。客觀性は決してわるいものではない、けれども今日に於いて作家に要求されるものは、正確以外に、善と惡とに對する無關心の態度を避け、自分の描く事象に對してより確固た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る位置を占めることであるといふのである。尤もこれは露西亞の批評家の言葉である。露西亞の批評家としてはさもあらうと思はれる。わたし自身はこれを左程の缺點とは思つてゐないが。

今一つは、セミョーンに比して兄のアントン（パーヴェル）のことが一向に書いてないといふ一事である。彼については、裏街から姿を消した後工場勞働者になつたといふ消息が傳へられてゐるばかりで、讀者は最後に彼が討伐隊の指揮者として現はれるまで、更に何の知識をも與へられてゐないのである。これは、彼の事はこの小說にとつて直接必要でなかつたから書かなかつたと言へばそれまでだが、ヂバンダ、ユダ等の過去までが特殊な形式を設けて特に語られてある點から見て、この辯解は許容されないと思ふ。勿論、彼の生活を語ることは、立派に別の主題を形作ることになるであらう。併し、兎に角これは、讀者にとつて確かに一つの不滿でなければならない。とは言へ、これは恐らく作者レオーノフが、セミョーンの內的破產を理解しながら、矢張り心理的にはアントンよりも彼に近かつたからかも知れないと言はれてゐる。聽くべき評言であると思ふ。

尙ほ仔細に檢討すれば、多少の缺點は擧げ得られるであらう。併しそんなことは最早末の末である。繰り返して言ふ、この作は確かに、時代の廣大なる叙事詩的展開である。新らしきリアリズムへの道標である。若しそれその小說的機構の巧緻、表現の新鮮等を云々するに至つては、最大級の讃辭を連ねても尙ほ足りない憾みがある。わたしの拙い譯文では、その飛び放れて優れた表現の筆致を十分に生かすことが出來なかつた。自分だけの苦心はをしまなかつたけれども。（中村白葉）

目次

穴熊……レオーノフ作　中村白葉譯……一
第一部……一
第二部……一三三
第三部……二五三

カヴーの繪……本文三一五頁の場景

穴熊（バルスキイ）

レオニード・レオーノフ 作
中村白葉 譯

むかし〳〵あつたとさ、
二人の親身の兄弟が。
一人の母に育てられ、
同じ幸福わけられた——
一人は金持ち
一人は貧乏！

（盲者のうたへる）

第一部

一、エゴール・イワーヌイチ・ブルイキン嫁取りに村へ歸る事

身分は市場の小商人、名はエゴール・ブルイキン、この若者がカザン節にモスクワから生まれ故郷の村へ歸つた。この男にはモスクワの古着市場に箱のやうな小店があり、そこには各種の客の爲めに、裝飾品なり日用品なりのあらゆる品目——指環でも、飾針でも、茶匙でも、リボンでも、紐でも、ハンケチでもがあつた……若者は小さく商ひをし小店の中から三カペイカ銅貨の咽喉で喚き立て、もくろみを立て、骨身を惜しまず金をため、そして精一杯の大跨で自分の目ざす頂點へと進んだのである。彼のことは市場ぢうの人が知つてゐた——ブルイキンの眼は斜視ではあるが眼はしが利いて、よく見える。ブルイキンの態度は粘りつこいが、薄い唇は敏活である、——エゴールは何か途方もない事をやつて自分を地上にしるしづけるであらう。

ところで、カザン節の一週間前に、ブルイキンは下水管の下で、つる〳〵に磨かれた五カペイカ銅貨を見つけた。この銅貨から彼に憂愁がまつはりついた。彼は痩せ細つて死ぬばかりになつた、彼が攝取したところの極めて貧弱な食物は、彼の憂愁を助長するに恰好であつた。そこである

時ブルイキンは、自分の部屋の寢臺の上に、蠟燭を傍において坐つて、自分の財産調べをして、考へ込んだ。と、彼には、大人物エゴール・ブルイキンの活動を以て世界を震駭する時が既に來たのだといふ氣がしたので、彼はその憂愁を自分の榮譽の前兆であると考へた。彼は商業思想に富んだ若者だつた、そして慰みには方法、金には勘定、えらい人には狡るい敬意、自身の爲めには眞の價値を心得てゐた。思ふさま熟慮を重ねたり、街での友達カラーシエフとともと相談したりした上で、エゴールは嫁取りに、收穫時に家へ歸ることに決心したのだつた。

……彼は停車場から勇ましい小鈴のついたナザローフカのトロイカをやとつた、――嫁取りの爲めには二十五ルーブル札位エゴールには勘定でなかつたのである。スースキヤで泊らないやうに、馭者には氣前よく堅パンでお茶を飲ませて、自分は退屈な四十四露里の長途に對してどつしりと具合ひよくみこしを据ゑ、煙草の唾をべつべと吐いて、道端の柱のなかの聖像におどけ半分の十字を切り、馭者に向つては勿體振つた眞面目な口調でかう言つた――

「さあ、しつかりやつてくれ。」

轅馬がひくと同時に、手綱が副馬の上で鳴つた。鐵輪が停車場道の大きなごろた石の上でおどろ〳〵とうたひ始めた。やがてわき路へまがると、路は深い、粘りこいほこりで柔かになつた。停車場の雜魚どもの、ごみ〳〵した鷄小舍が、重々しい裸麥の野にかはつた。そして周圍には、エゴールの故郷の古い馴染の光景が、後へ〳〵と泳ぎ去りながら動き出した。

傍らを、遠い秋の爲めに濕氣の多い寒氣を貯へてゐる深い谷が泳ぎ去り、ほこりと風にいためられて道端に立つてゐる十七本の白樺から成る豆のやうな小さい森も、泳ぎ去つた。裸麥のパンのひときれのやうな、怠け者で容體振つた、揃つて藁葺きのペドリャーガ村も泳ぎ去り、いつかエゴールカがペドリャーガの叔父のところへ客に行つて、子供達とテニスをしたことのある剽輕者の野も泳ぎ去つた。

兎共は林端を飛び、雀共は羽音を立てゝ舞ひあがつた。つぎはぎだらけの法衣をつけた年寄りの坊さんが、おじぎをして裸麥の方へよけながら、傍らを這ひ通つた。彼等はまた、七露里向うの同年の女の許へ――見舞ひをしたり、變つたことをさぐつたり、女友達のところのパンが少し苦くなつてゐないかどうか、一口やつて見たりする爲めによろめいて行く一人の女房を追ひ越した。そして彼等の上に

一切のものゝ上に、エゴールの馬車の通過につれて、濃い土ぼこりが嵐の雲となつて舞ひあがつた。

エゴール・ブルイキンには、嘗て徒歩で通つたことのある、半分がた忘れてゐたこれらの場所を、背の高い旅行馬車の上から見渡して行くのが愉快になつた。見ろ、――空だつて、可愛いゝぢやないか、雨にやなるまい！　裸麥はもう花が濟んでゐたが、風は、朝鮮朝顔や裸麥の花粉の雲と戯れながら、その上を驅けまはつてゐる。斑の小鳩のやうな犢は、垣根際に結はへられて立つてゐる。蒼茫たる遠い森の上へ落ちかゝつた一日の歩みに疲れた太陽は、徐ろに日沒線を目がけて傾きつゝある。全く、早く休むがいゝよ、君――君だつてこれからまだ眞晝の熱で百姓の收穫をふきわけてやるのは飽き〳〵するだらうからな！

……エゴールの魂は無精に浮き立つた。

「どうだい、この邊ぢやまだ收穫は始めてないのかい？　聞かないかね？」

「この上何をとりいれするだね！」と馭者は罪のない顏をして笑ふ。「まあこの裸麥の有樣を見ねえだかよ？　もうこれ二週間もうつちやりぱなしで、二週間も花が咲いて、二週間もほろ〳〵こぼれてるだ……が、見なさろ、あの邊ぢやまだ白くもなつてゐねえだよ！　ところが人の話ぢや、グサキイの人達やもう鎌の刃をつけてるつてこんだ。」と顏を振り向けようともしないで、馭者はもぢや〳〵した頭髯の中でぶつ〳〵言ふ。

「刃をつけてる！」とエゴールは、眞面目な怒りを感じてかつとなる。「お前のグサキイなんて奴等は、まるで罐輜かジプシイ見てえなもんぢやねえか！　怠け者の節句働きて奴だらう――畜生め！……」

手綱は汗ばんだ馬背でをどる。と、また、疲れを知らぬナザローフカのトロイカは、だら〳〵と長い、怠け者の露里どもを征服する。日は次第に夕暮れに移る。遠景が寒むざむとして來る。周圍の情景は單調になりかけた。淡いほこりの中で、エナメルの花聟の長靴は灰色になつた。

睡りを催すやうな、快い小流れとなつて、空想がエゴールの頭を貫いて流れる。――村へ着くと、彼は手風琴を持つて、ヴイセールカのミーチャ・バールイコフのところへ客に行く。客に行くと、彼等は二人並んで入口の段々に腰かけて、――どうしてゐた、何を飲んだ、何の自慢をしに歸つたのかなどゝいふつまらない話のかはりに、仲よく二挺の手風琴を彈いて遊ぶ。それから手風琴を輕く肩へ投げか

けて、ミーチャに羨望と刺戟を與へながら、自分の長靴を引張る、更にポケットから何氣ない態で、ふたに女の裸像のついた八百四十位の銀製の卷煙草入れを取り出して言ふ——

「どうだい、ドミートリイ・ドロフェーイチ、細卷を一本やらねえかね？　正眞まがひなしの土其古煙草だよ、一箱二十五カペイカだ、大店で買つたんだ！……」

空想に疲れて、エゴールは頭をぐつたりと肩の上へかしげる。自分の婚禮の息づまるやうな醉態を豫想することは、花聟にとつて甘いことである。おゝ、エゴールカよ、お前の生活は自由である！　見ろ、どれだけの地上の場所がお前の自由に任されてあるか。

「たゞ親父せえ死なゝかつたらな、何をするにも都合がわりいや。」エゴール・イワーヌイチは聲に出してから歎息して、またしてもぐつたり項垂れてしまふ。

「あんだねえ？……」と馭者は無關心な調子で聲を引張る。

「まだな、路は大分あるかつて訊いてるんだよ。」とエゴールは荒つぽく叫んで、腹立たしげな横眼で、皺だらけの、汚ならしくあかい馭者の頸筋を見やりながら、甲斐絹まがひの背廣の中で空想に興奮した身をちゞめる。

「自分で勘定して見るがえゝだ……ペドリャーガからロゴージンまであ五露里ちうことになつてるだが、わしらもう二露里はつゝ走つたゞ。ロゴージンからスースキヤまであ十露里だあ。これで勘定したらわかるべえ……」

風のない空はそろ〳〵暗くなりかけた。草場の端には、夕燒けの優しい帶が、遠い森の向うでくすぶつてゐる。道路沿ひの叢林は、同じやうにまるくなつて立つてゐる。勤勞の日の後の睡りの大きな休息がその端へ近づいて來る。

トロイカが不意にとまつた。馭者は馭者臺から飛びおりて、叢林の薄暗がりにぢつと見入つた。やがて、みち〳〵しびれた足を揉み柔らげながら、のろ〳〵とその叢林の方へ行つた。母はエゴールを烱眼な人間に生みつけた。エゴール・イワーヌイチは叫んだ——

「おい、閣下は大方なまの果實汁つきのキャベツでも召し上らうてんだな？」

相手にはよく聞えなかつたらしい。次第に募つて來る不安を以てエゴールは旅行馬車から身を乘り出した。馭者は叢林の上へかゞみこんでゐたので、その言葉の斷片すら、エゴールの欹てた耳へは屆かなかつた。馭者はやがて戻つて來たが、見るとその兩手に、年の頃十三ばかりの男の子を、輕々と——まるで菩提樹のやうに運んでゐる。子供の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com